

隨泉寺寺報

2002 年 7 月号 第383号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺
安居会法座

講師 高田郡吉田町 法専寺住職
蘆 澄心師

講題 「ああ 我が人生」

前門様ご遷化

6月14日午後1時16分西本願寺第二十三代御門主 大谷光照様(前門様 勝如上人)が、ご遷化されました。前門様は昭和2年に15才で第二十三代御門主に就任され、65才で現御門主に法灯を継承される52年までの50年間、日本最大の教団本願寺の門主職をつとめられた。6月17日日本願寺内事部分室で「荼毘式」(密葬)が勤められた。ご葬儀は7月18日午後1時より本山総御堂で営まれる。

私も僧侶になる得度式を前門様に執行していただいた。前住職(老院)も前門様である。ご門徒の皆さんもおかみそりを前門様にさせていただいて、「法名」を付けてもらわれた人も、多い事と思います。今年は入退院をしておられることで、心配をしていましたが悲しい事です。今回のご講師の

蘆 澄心師は、本山におられたとき、内事部という部署で前門様のお世話をされる役職でしたから、いろいろ思いでもあるでしょう。

7月の行事予定

- 7月14日昼席午後1時より…… 安居会法座
- 7月14日夜席午後8時より…… 出張法座東長者原 椿谷通俊氏宅
- 7月15日朝席午前10時より…… 主婦の集い
- 7月15日昼席午後1時より…… 安居会法座
- 7月20日午後5時より…… 隨泉寺ピアガーデン

御門主様のご教辞

「ついに、前門主とこの世でのお別れをする時がきました。激しく移り変わる時代の中で、宗祖親鸞聖人の変わらぬみ教えを伝えられた九十年を偲び、後に続くものの自覚を新たにいたしたいと思います。諸行無常、平生業成のみ教えをいただきます私達は、平生に心の準備をしておくことは当然のことではあります。いざとなると思わぬ不行き届きもありました。葬儀には態勢を整えて、この世でのお別れをするとともに、ご本願念仏のみ教えを受け継ぎ、時代、社会に即して伝えていく思いを新たにいたしたいと思います。」

武野以徳本願寺総長談話

本願寺第二十三代御門主 大谷光照様(前門様 勝如上人)が、ご遷化されました。既に無上佛となられ、還相摂化の悲用を起こされると存じ上げます。私どもはその大慈大悲のおはたらきを頂戴いたしている身ではございますが、凡情としては、こみ上げる悲しみを禁じ得ません。ここにご一代のご化導に深甚の感謝の意を表し、哀悼の誠を披瀝する次第です。同時にこの逆縁を通して、ご遺訓に従いお念仏申す人生を歩ませていただく覚悟を新たにいたしたく存じます。

主婦の集いのご案内

7月15日安居会法座二日目を主婦の集いと致します。【仏法は忙しい世間の仕事を差し置いて聞かねばならない。それなのにあなたは、ひまが出来たら聞こうと思ってはいないか。それはあさはかなことである。仏法のうえから言えば、老少不定の身であるから、明日があると思ってはならない。《蓮如上人御一代聞書》より。お忙しいと思いますが誘い合わせてお参り下さい。

隨泉寺ピアガーデン 7月20日(土)《海の日》午後5時～

今年も去年に続いて隨泉寺ピアガーデンを開催します。今年は空梅雨かと思っておりましたが、やはり雨が降って蒸し暑い日が続きます。こんな時はビールでも飲んでウットオシイ梅雨をふっとばしましょう。野菜や果物があれば協力して下さい。



三回忌を迎えるにあたって

平成12年8月19日土曜日 その日の朝、いつもと変わらない暑い一日が始まるころでした。私は10時頃までに家事を済ませ、出かける準備をして玄関に向かったその時電話が鳴りました。「もしもし、泰生君の友達の下山です。今、岡山のTIサーキット場なのですが、泰生君が練習走行中に転倒されて、救急車が来るのを待っている所なんです。これから病院に行きますが、多分入院される事になると思います。詳しい事が決まったら、又連絡しますので。」息子のオートバイレース仲間の山下さんからの第一報でした。それから間もなくして、二回目の連絡がありました。撤送先の病院の住所しか分からない。容態は不明との事。主人と長男が帰り次第、病院に向かう事を先方に告げ、闇雲に入院の準備をしながら、次の連絡と家族の帰りを待っていました。三度目にレース関係者からあった連絡では「なるべく早く来てほしい」と言われ、もう何も手につかなくなっていました。最初の連絡から1時間くらいした頃、長男が帰宅してきました。部屋の中をウロウロしている私に座るように言いました。平静を装う長男の顔には、明らかな違和感を感じました。「泰生が死んだって。」長男はそう短く告げました。気が遠のいてしまい、「信じられない、嘘だ。」と何度も喚きながら、ただ泣き叫ぶばかりだったと思います。そして、気持ちの整理もつかないまま、帰ってきた主人、長男、駆けつけてくれた甥と共に、息子が待つ岡山の病院へ出発したのです。そして、泰生は物言わぬ姿で、私たちを迎えてくれたのです。

泰生は家を離れ、一人暮らしをしていましたので、その日の岡山のレースの事も知らされておりました。私が心配するものだから、サーキットに行く事はあまり話さないようにしていたようです。たまに



話してくれる時は、「サーキットは安全に作ってあるから大丈夫よ。道の脇にはクッションがあって、ぶつかっても大丈夫なように作ってあるんだから。厳しいテストや検査があって、みんなルールを守って走ってるんだから大丈夫だって。そこら辺を暴走しよる人達とは違うんよ。」と私達を諭すのでした。そしてある日は、レースの帰り道に家に寄って、入賞して表彰台に登った際の、首飾りやシャンパンの空き瓶を振って見せてくれた事もありました。その時の笑顔は今でも忘れられません。



最期のレースの数ヶ月前に「いつまで走るの」と聞いたら、「もう少し走る。そうしたらもう走るの止めるよ。」と書いていたのですが、実はその最後のレースが今回だったようで、バイクもオークションに出品して、入札者がそのレースを観にきていらっしやうです。本当に最期のレースだったのです。バイクを輸送するためのワゴン車の中には、泰生の「最期のメモ」がありました。レース中のアナウンスで使われる自己アピールの下書きし、「今日は頑張ります。こけないように走って、ゼッケン6番と同じ6位までには入りたいです！」とありました。最期までがんばったのが目に浮かぶようです。

泰生にもう一度会って「これまでよう頑張った。バイク大好きだったね。でももう転けたらだめよ。27才の若さで親より先に死んだりしたら、悲しいよ。辛いよ。泰生が可哀想よ。」と伝えたい。仏前で話しかけても返事はありませんが、横に立てかけてある写真の中で、誇らしげにバイクと並ぶ泰生が「母さんが泣きよる」と笑っているかのようです。

泰生も頑張ったのだから、父さん、母さんも頑張らないといけない。そう思いながら、今年の8月に3回忌を迎えます。

勝部千賀子